



第1回 大河ドラマ「風林火山」をめぐって 平成18年9月19日
講師／佐倉一徳さん NHK長野放送局企画総務部副部長
樋口 博さん 長野市産業振興部観光課課長

第2回 もっと楽しくて、元気な街づくりを 平成18年10月23日
講師／久米えみさん ながのクラッセ会長
樋口敦子さん ながのまちづくりカフェメンバー

第3回 スポーツによる街づくりを 平成18年11月21日
講師／鷺沢幸一さん アスレながの事務局長
室賀 豊さん 長野市アイスホッケー協会理事

第4回 写真で見る長野の街並み 平成19年1月23日
講師／清水隆史さん フォトグラファーほか
常盤昭二さん CMディレクター

●わいがやサロンスペシャル
スポーツによるコミュニティ再生 平成19年2月22日
講師／二宮 清純さん スポーツジャーナリスト

第5回 健康と美容を保つために 平成19年3月22日
講師／虎羽里(トラバリ)ゼーラさん アーユルヴェーダ・健康セラピスト

第6回 環境と街づくり
ぱていお大門・TOIGOの設計に参画して 平成19年4月23日
講師／竜野泰一さん 株式会社エーシー工設計 取締役副社長【一級建築士】

第7回 信濃グランセローズの挑戦 平成19年5月21日
講師／木田 勇さん 信濃グランセローズ監督

第8回 スポーツマンシップの大切さ 平成19年8月29日
講師／荻原健司さん 参議院議員・五輪金メダリスト

第9回 トウガラシの尽きせぬ魅力／
「農」による地域活性を探る 平成19年10月24日
講師／松島憲一さん 信州大学大学院農学研究科 准教授

第10回 命のバトンを渡す「ピオトープ」/
長野市をピオトープネットワークシティに 平成19年11月14日
講師／松岡保正さん 国立長野工業高等専門学校 環境都市工学科教授

●わいがやサロンスペシャル
長野・考/長野の明日を話そう 平成20年2月14日
講師／中馬清福さん 信濃毎日新聞主筆

第11回 簡単・おいしい・オシャレ/わたしのレシピができるまで 平成20年3月26日
講師／浜このみさん クッキング・コーディネーター

第12回 あなたのからだは「築何年」ですか? 平成20年7月14日
講師／角本浩二さん バランスマドバイザー 長野県健康管理士会会長

第13回 アメリカ生活で感じたあれこれ
—変化に対して前向きになることの大切さ— 平成20年8月19日
講師／針谷友久さん 東京中小企業投資育成株式会社 主任(長野県担当)

第14回 市役所第一庁舎及び長野市民会館の在り方を考える 平成20年9月16日
講師／水野守也さん 長野市総務部次長 兼庶務課長

第15回 長野パルセイロ — 優勝報告&JFL昇格への挑戦 平成20年10月29日
講師／バドウ・ビエイラ監督、薩川了洋コーチ、貞富信宏キャプテン

わいがやサロン

通信

Vol. 29
2011.6



東北に出動した長野市消防局の「緊急消防隊後方支援車」(拡幅時)。
消防業務の最前線基地、隊員生活拠点の役目を果たす



NUPRI
Nagano Urban Policy Research Institute
NPO法人 長野都市経営研究所

T380-0834長野市大字鶴賀問御所町1289-1丸本ビル2F
TEL.026-235-7911 FAX.026-235-6166
www.nupri.or.jp
e-mail: nupri@nupri.or.jp

NUPRI
Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人 長野都市経営研究所

第29回 防災と危機管理

平成23年6月1日(水) 18:00~20:30

講師／安藤長一さん 篠ノ井消防署署長、緊急消防援助隊長野県隊長(第二次派遣隊)

■座長 岩野 彰 場所／NUPRI事務所 TEL.026-235-7911

このたびの東日本大震災ならびに長野県栄村で被災された方々のお見舞いを申し上げ、一日も早い復興をお祈りします。6月のサロンは両震災後初めてとなりますので、現地で救命活動にあたった長野市消防署員を代表して安藤長一篠ノ井消防署署長において願い、報告と長野市においての防災および危機管理についてお話をいただきました。

全国の消防局(署)には緊急消防援助隊(24時間365日、直ちに出動態勢を維持)が組まれています。3月11日14時46分、東北地方太平洋沖で大地震が発生という情報、同49分大津波警報、16時40分総務省消防庁から長野県に出動要請→同45分長野県から県下消防本部に出動要請→18時00分長野市消防局緊急消防援助隊が宮城県へ出動しました。黒姫パーキングエリアで、長野県隊が結隊式をすませ被災地へ出動するなか、翌12日3時59分栄村で大地震。総務省より各県に要請が出、長野県および長野市は東北への出動と同時に支援にも対応=いまだかつてないことが始まりました。

東日本大震災

東日本大震災においては、私たちは宮城県消防応援活動調整本部=宮城県知事/札幌市指揮支援部隊長の下、塩釜地区担当の長野県隊として活動しました。11日当日より初動した第1次派遣隊の長野県隊は43隊150人、うち長野市隊は6隊24人。私は13日の朝から16日まで第2次派遣隊(長野県隊36隊136人、うち長野市隊6隊23人)の隊長として任務にあたりました。

4月2日の撤収命令が出されるまで計23日間、延べ部隊数長野県245隊、904人、長野市からは延べ部隊数46隊、173人。長野県隊が救出した人員は発見75名(内74名救出、34名生存)、救出搬送137件(4/3現在)です。

§

§

緊急消防援助隊は自給自足が原則(食料、水、燃料、簡易トイレ等、最低3日分持参)ですので3泊4日~4泊5日交代が9次に及びました。私たちは宮城県総合運動公園(利府町)に野営し、塩釜市・多賀城市・七ヶ浜町・名取市に車で移動して救出活動に従事しました。一般電話の不通は覚悟していたものの携帯電話も不通/水が身長、首まで来るところがほとんど/ゴムボートが釘で穴があいてしまう/エアテント内は極寒、等々……そんな中でも消防庁が緊急消防援助隊の充実強化策として無償使用制度を進めていた支援車(表紙:3月お披露目予定だったが、6月になった)が県代表消防機関の長野市に導入、稼働出来たことは不幸中の幸いだったと思います。



あんどう ちょういち 1953年 長野市生まれ。昭和47年長野市消防局入局、以降消防、救助業務を主に歩み、平成18年中央消防署消防第二課長、平成20年鳥居川消防署長。平成22年から現、篠ノ井消防署長

長野県北部地震

3月12日3時59分、栄村で震度6強の地震が発生。(震度5以上の場合、職員は自動参集。状況により出動することになっている)県庁内に調整本部が開設され、職員2名派遣。5時40分、岳北消防本部状況把握のため職員2名派遣。同時刻、神戸市消防局指揮支援隊が県庁に到着。奈良県・兵庫県隊を受け入れるべく松代PAで篠ノ井指揮隊、松代指揮隊が支援活動を実施。実は長野のヘリは東北に行ってしまっており、大阪市・京都市消防局から応援ヘリが来て孤立住民を救出するまで10時間かかりました(ヘリは1台1台異なる特徴機能をもつため、免許も同じでないことが初動の難しさを増しているという反省)。M6.7という地震にもかかわらず人的被害が少なく食い止められたのは、豪雪地ゆえの堅牢住宅が多かったからと思われます。



多賀城市八幡地区で男性1名を発見、救出(3月12日)

地震が起きる地形である日本列島での地域防災力強化

皆さんご承知のように、日本列島周辺は日本海溝・相模・駿河・東南海・西南海トラフというプレートが潜り込んでいる地形で、今後30年以内にいつ大地震が起きてもおかしくないといわれています。

けれども私たち(ひと)は災害心理学でも述べられている「正常性バイアス」によって、「そうであってほしい(災害は起こってほしくない)」がために事実を客観的に捉えることをなかなかしません。——平成16年に起きた新潟県中越地震では長野市消防レスキュー隊も救助活動にあたりましたが、初期にNTT回線、防災行政無線とも繋がらず情報孤立地域が生じたことが課題になり、それを教訓に衛星携帯電話を市町村役場・消防本部に設置、地域の状況を把握している消防団長と直接連絡をとれる体制の確立等、対策が種々とされました。けれども今回の震災が比較にならないほど大きいとはいえ、広範囲・長時間にわたり携帯電話が不通状態になり、また私の携帯電話も衛星携帯でなく苦労しました。——「そうである(地震等災害は必ず起こる)」と意識を変え、地域防災力の強化をはからねばいけないと思います。

昔の人は身近で起きた大災害を忘れないために人々が行きかう場所に石碑を建て、後世に語り継ぐということをしました。大阪大正橋、堺大浜公園、桜島爆発の石碑などがその例です。善光寺地震後に被害を検証した絵図も遺されています。

事実を客観的に捉えて最悪に備えること、住民の視点に立った防災対策を進めなければいけない、と長野市では毎年各戸に洪水ハザードマップ、土砂災害マップを配布してきました(地震防災マップ作成中)。それらを使って日頃から図上で防災訓練(状況予測、シミュレーション等)をゲーム形式ですることをおすすめしています。今回、東北という不慣れな未勤務地で救命活動をおこなった我々の経験として、災害時に使用するとなるマップは、同縮尺であること・地名(大字小字)^{おおあざ こあざ}記載の必要性を痛切に感じました。

§ §

災害の根絶は不可能です。私たちは、限られた予算・資源を集中させ被害の最小化を図る「減災」に取り組んでいきます。ひとつたび災害が起きれば、行政も含め、全員が被災者になります。日頃からご近所が助け合いましょう。そして皆さん、「天災は(忘れたころに来るのではなく)毎年のように来る」を肝に銘じてください。ご清聴ありがとうございました。



派遣後半になるほど心身の疲弊は大きかつたはずで、隊長の役目の一つとして、野営に戻った隊員たちが今日あったことを話して、気持ちを発散させることに重きを置いたそうです。日常勤務に戻りましたが、今後もメンタル面を大事にしていきたいとのことでした。

お話を聞きして

このたびの救援活動、本当に疲れ様でした。昼夜たがわづ「人を助ける」ことが仕事である消防士の皆さんには頭が下がります。私たちは災害に遭われた方々を継続して思いやり行動すると同時に、ご提案の災害図上訓練をいたしたいと思いました。

